



TITLE:

海外日誌(二十七)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(二十七). 天界 1925, 5(53): 195-199

ISSUE DATE:

1925-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160250>

RIGHT:

海外日誌 (二十七)

文部省在外研究員 山本一清

大正十三年十月十一日(土)

朝、自動車で、國際客團は郊外散歩に案内され、エプロ河上の水道水源地あたりを見、更に引き返して、トートサの公園に少憩。正午過ぎ、荷物をなまめて、皆、停車場に集まり、驛の食堂で送別の宴となつたが、乗る客の列車が來着したため、市長の演説もそこへして、一同大狼狽で汽車に乗る——之れも旅の一興には違ひない。

午後六時、パルセロナ着、自分等はスペインの若手の接待員たちと共にホテル・コロンに入る。

十月十二日(日)

取りあへず、朝の間に自分等兩人はカナリーニヤ廣場、カテドラル、市廳廣場を経、フエルナンド街からレアル廣場まで散歩した。今日は恰も此のスペイン國御自慢のコロンプスがアメリカ發見した記念日なので、小供や大人が街々たる所で御祭騒ぎをやつてゐる。——さもあるべき事。

日曜にも拘らず、今日は吾々國際客に對する當パルセロナ官民の歡迎會が催される。——先づ午前十一時、代員たちはラムブラ通りの王立アカデミに集まり、(此所で自分は天文臺長コーマス・ソラー氏に面會した)十臺ばかりの自動車に分乗して恐ろしい車塵をあげつゝ、デビダボ山に登る。(自分等兩人はソラー氏と同乗した。)登つた山上の遊園地の立派なレストランで市長の午餐會、それから又、ソラー臺長の案内でフアラ天文臺を參觀した。

天文臺は海拔一千五百尺の山の上で、パルセロナ全市を見下す景色の佳い所に立つてゐる。器械は八時の子午環と十五時の赤道儀とであるが、臺長ソラー氏は小遊星の有名な觀測者である。臺長工案の天文用立體鏡は、かてて聞いてゐたが、實見して、「之れも一工夫だ」

面白く思つた。

十月十三日(月)

公式の御客あつかいは昨日を以つて終り、今日からは全く自由の身となつた。朝の中、スペイン委員エストレメラ氏夫妻やサブセド君たちミランブラ通を散歩したりしたが、午後は吾々兩人だけでロンド、サン・ノア、公園、コロ、アンチヤ、フエルナンド、ボケリアの街々をあるき、最終のスペイン氣分を味つて、八時頃宿に歸つた。——パルセロナが、國都マドリドに幾倍して、熟した、又、近世的明るみのある、又、自由精神のみなぐり市であることは意想外であつた。

十月十四日(火)

早朝七時、パルセロナの佛蘭西停車場發。正午、セルベール通過、佛國税關の検査を受けた。之れで全くスペインと縁切りになつたわけ。それから汽車は尙海岸を北進し、四時にナルボンヌ驛まで來て乗り換へ。七時モンペリエーで途中下車をし、ホテル・ド・ラ・メトロポールに入る。

夕方、外出、グラス・ド・ラ・コメデイで食事し、田舎町のあちらこちらを歩いた後、エルドラド座で「ネロン王」の活動寫真を見る。此頃の新聞は文豪アナトール・フランスの死と其の一生のことを盛んにかいてある。

十月十五日(水)

三週間の(或る意味で)窮屈なスペイン生活より開放された自由さを味ふために下車した此のモンペリエー市に、今日はいく心の底からくつるいだ氣持で見物の時間を費した。まづコメデイ廣場から劇場、それから「天文臺」と俗稱せられ今は浴場となつてゐる跡、まちの市場、轉じて凱旋門からルベリを経て、ルイ十四世の像、水の城、植物園カテドラル、エスプラナード、こうした順に見てまはり、最後にフアブル博物館でレイノルドの「小さきサムエル」等幾つかの有名な繪を見た。

四時モンペリエー發。五十分後に又次の市ニム着、下車。ホテルリユクサンブルに入り、史蹟の多い此の所に明日まで滞在を決める。

夕方、散歩して、エスプラナードから、賑やかな夜の街々を歩く。

十月十六日(木)

朝食後、まづ有名な圓形劇場を見た。第一世紀頃の建築であるといふ此の古物を、今も尚、シアズンには闘牛場として用ふるさいふのが面白く感じられた。二三日前、現佛國大統領ドゥメルグ氏が生れ故郷の此の町に歸つて來て、

やはり此の劇場の中で市民に歓迎されたといふ——その時の飾り付けの跡が今日も街々に見えてゐる。

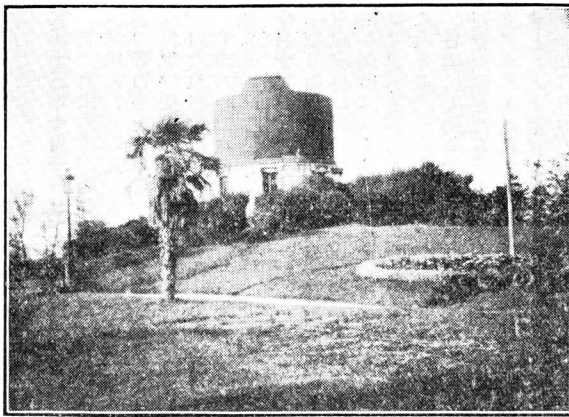
レ・ザレーヌから、次は噴泉公園へ行き、カザリエーの丘へ登つて、不思議な古建築トゥル・マリーニユを見、又、公園へ下りてデアナの宮の跡を訪れた。一人の門番が親切に説明してくれたが、それに何の飾り氣もない態度が亦嬉しかった。——公園を出て、メイゾン・キヤレ、市場、カテドラルを見、宿に歸る。

正午ニム發、タラスコンで急行に乗り換へて

四時にマルセイユ着。ホテル・ルーヴル・エ・ラ・ペイに入る。——夕食には待ち兼ねた日本食をたべて満足々々。

十月十七日(金)

大港に來たのを幸ひ、二三の汽船會社を訪れて、後日の旅行豫定の



参考とする。

午後はロンシャン宮殿と動物園を経て、天文臺を訪問。シャプレイ氏の紹介状によつて、臺長ボスレ氏に會ひ、三十時の反射鏡を始め色んな設備を見せて貰つた。建物や器械類が荒れてゐるのは、經費と人員の不足による。臺ははしきりに言ひわけを言つてゐられたのは、ホルドーの場合も想ひ合はされて、氣の毒の感を深くした。それでも「明後年のスマトラの日食には觀測に行きたい積りです」と言はれた決心には驚いた。——時計室には「ラブラスが二八〇四年に此所へ寄附した」といふマークの附いた振り時計が一つ動いてゐたのは興味深く見た。(上の寫眞はマルセイユ天文臺)

獨逸フリードリヒス・ハーフェンを出發した飛行船「R3」が、佛、葡の空からアズレス島へ、それから西北に飛んで六十八時間に首尾よくポストンに着いたといふ電報記事が、此頃は歐洲の各國の新聞を賑はしてゐる。

十月十八日(土)

日本郵船の笠崎丸がロンドンから來着したと聞いて、急に日本の船といふものが見たくなり、又、マルセイユの港も見たいといふ好奇心が手傳つて、午後、電車で船着き場へ行つた。笠崎丸は威勢よく岸壁に横附けになつてゐた。

それから、見事な、しかし、未完成のカテドラルを見、後舊港入口に高く架けられてゐる名物の大橋ボン・トランスポーターへ上り下り、次で醫科大學庭から、南の丘上のノートルダムに上つた。——マルセイユの景色は之れで大抵見たわけだ。

十月十九日(日)

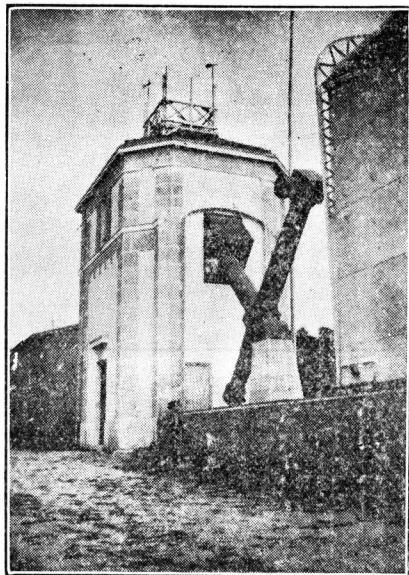
朝十時半マルセイユ出發。佛蘭西リギエラの有名な景色を窓から見つゝ、午後、三時ニース着。ホテル・リシリウに入る。

日の没する前にさ、早速、宿をさび出して、アズニウ・ド・ラ・ガールを散歩。禮拜式中、槍持ちの番人で護られたノートルダムの中を一瞥し、それからマセナ廣場を経て、公園の傍の海岸の砂上で少憩。恰も、日が海のあなたに没して、市街には一面の電飾が輝き始める。

欠しぶりに南加州の晴れやかな思はせるやうな此のニースの海岸あたりを渉遙した此の夕は樂しかった。

十月二十日(月)

昨日、停車場に下りた時から遙かな山の上に景氣よく見えてゐた此のニースの天文臺へ、今日はタクシ自動車雇つてモン・グロの坂路を登る。此の天文臺にはフアユ(臺長)、シヨウマス諸氏が居る筈であるが、生憎、今日は不在と言はれ、止むを得ず一助手に案内されて



ニース天文臺のテグ式望遠鏡

大三十時屈折式赤道儀を始め、八時・午環、十五時赤道儀、十六時クデー式望遠鏡等を見せられた。自分がクデー式を見るのは之れが初めてである。——餘興ではあるが、山上からの景式は絶佳と言ひたい。

午後一時ニース發、リギエ海岸を更に東へ。モンテ・カ、ロヤマントンあたりの有名な別荘地帯を見つゝ、二時半には佛伊國境を通過して、税關検査のためバンテミリアに下車した。——此所で時計はグリーンヒチ時刻から一時間早い中歐時刻に變るのであるが、其の事は

すつかり忘れてゐたがため、遂に豫定の汽車に乗り遅れたのは大失敗であつた。止むを得ず、海岸を散歩したりして時を消し、午後七時發の汽車に乗つた。

セノヅへは夜半に到着。ホテル・ロンドンに入る。

十月二十一日(火)

終日セノヅ見物。カテドラルや公園を見たが、特別なことなし。——セノヅは例のアメリカ發見者コロンブスの生れた所で、ために、停車場前には可なり眼を惹くコロンブスの像があり、又、市中のボンテセロには、彼れの生れた家さいふのが、死れたまゝ、名所として殘されてゐる。自分として、多少の感無きを得ない。

夜、市中を散歩し、偶然、オリムピア劇場と稱する驚くべき立派な活動寫眞館を見た。

十月二十二日(水)

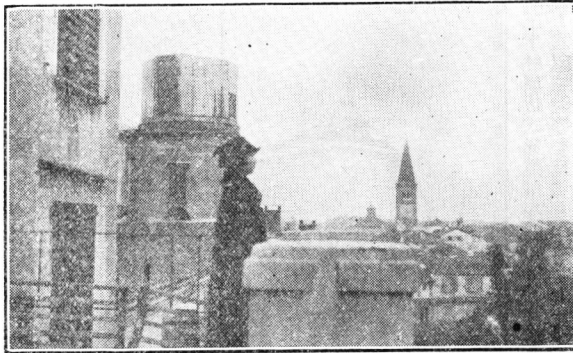
朝七時半、ミラノに向けてセノヅを出發した。多くのトンネルによつてリグリアの山脈を越えろと、早くもポー河に養はれるロンバルデヤの平野で、古い歴史の聯想が車窓からの景色によつて誘はれる。十時にはバギアの大學町を通過、米の成る水田を珍らしいと見てゐる中に汽車は正午少し前ミラノに着いた。すぐホテル・デ・ノールに入る。天文臺の訪問は明日にゆづり、今日は此の北伊の美術都市を只の見物客として歩きまはつた。まづサンタ・マリア寺でレオナード・ダヴィンチの「最後の晩餐」を見、次でサン・アンブローシオ寺に聖アンブロシウスやアウグスチンの古い史蹟を思ひ、更に有名なドーモに參詣して、遂に四百七十六段の屋上尖塔まで登りつめた。景色は好かつたけれど、「足元の恐ろしさは長く直立するを得ざらしたと云ふぞ、弱虫に聞えるが、致し方もなし。但し、空は曇り、遠望は駄目。

十月二十三日(木)

午前は、やはり、博物館や公園めぐり。

午後、ブレラ學院内の天文臺を訪問。ガバ教授に迎へられ、十八時赤道儀其の他の設備を見せられた。此の天文臺は王立ブレラ・アカデミ一所屬のもので、既に百五十年以上の歴史を持ち、オリアニ等の居た所

であるが、一般社會には、かの火星運河の発見者たるスキアパレルの名によつて廣く知られるに至つた。此の日、スキアパレルが火星觀測に用ゐたといふ八時の望遠鏡を見せられたが、當然さば言ひながら、其の、小形で舊式なこと!!「こんな器械で好くも細かい遊星觀測が出来るものだ」と、あきれる程だつた。十八時の方は、電動力を應用した可なり近代式のものであるが、ガバ教授の言によれば、今の天文臺の場所が市中の賑はひに妨げられるため近い中に他へ移轉する計畫中であるとのことであつた。



十月二十四日(金)

二三日前から空模様は漸次悪くなり、しめり勝ちで、氣温も低く、吾々兩人はミラノで風を引いて了つた。——既に見るものは見たのだから、今日は出發するさし、伊太利アルプスの賞景もすて、一路チウリヒへ向け朝十時の汽車に乗る。窓外は雨。コモ、ルガノあたりの湖水が霞の中から見えたのみ。——午後三時過ぎ、有名なサン・ゴタールの

大トンネルを通つたが、此の頃から空は晴れ、深いアルプスの遠近が窓ガラス越しに美しく見えるやうになつた。同時に、寒さは一層増し加はり、山々には可なりの雪が積つてゐた。

午後五時半、チウリヒ着。シンブロン・ホテルに入る。

十月二十五日(土)

朝十時頃、大學と高等工業の學校附近を歩き、シメルツベルグ街の坂を上つて、大學天文臺を訪れた。リクのトフムプラー氏の紹介狀を通じて、臺長チルフア教授が快よく迎へられ、六時赤道儀や、十三時寫眞望遠鏡や、その他種々のものを見せられた。此の天文臺は前のチルフア臺長以來、太陽黒點の繼續觀測をやつて、既に半世紀の觀測史を持つてゐる。今は右の六時で眼視的に黒點と紅斑とが毎日觀測される。「紅斑觀測の結果はフイレンツエ(伊國)のアベティ教授へ送ります」とチルフア氏は言つてゐられた。序でに、昔しナルフ教授が用ゐたといふ三時望遠鏡を見せられたが、今から思へば氣の毒なやうな器械である。十三時寫眞望遠鏡は比較的新しい設備で、之は星團の研究に用ゐるとのことであつた。

チウリヒは、賑やかな停車場通りに近く、ウラニヤ天文臺と呼ばれる私立の高塔がある。午後、之にも兩人で登つて見た。高さ六十尺の塔の上のドームへエレゾーターで上げられると、其のエレゾーターの主人が早變りして、一かごの天文學者となりすまし、可なり好く出来たツァイスの十二時望遠鏡を操つて、たま／＼晴れた空の太陽黒點を見せて呉れたりした。

此のチウリヒ市は其の同じ名の湖水に望んだ可なりの都市で、工業の外に、學問上からも、遊覽地としても有名なものである。自分等は今日、午前も午後も、暇あるにまかせて、方々を歩きまはつたが、今まで聞いた此の市の評判は全く其の通りだと思ひ感心した。

十月二十六日(日)

四五日の間、瑞西國內旅行を思ひ立ち、タツタの回覽切符を持つて今朝七時半チウリヒを出發。

九時、ルツェルンに下車して見たけれど、日曜のことであり、又、遊覽季節を今は外れてゐるので、市街は雜踏せず、却つす都合であつた。電車で湖水橋をわたつて、氷河庭園や獅子記念像それからホフ・キルヘ(等)など、見るべきものを一通り見、あさは湖水に沿ふたナチオナル街あたりを散歩した。空も其の時頃から晴れて山や水の景色を

見せてくれる。

午後二時、ルツェルン發。人の少ない車の中を、借切りのやうに自由にして、移り變る美景を喜びながら西へ走る。全く繪にあるやうな山と野と水の景色。山は重疊して白雪をいたゞき、野は緑りで、白黒の牛を遊ばせ、水は亦細い川にも深い湖水にも種々の變化を見せてゐる。——此の日、此の行はゞ眼をよるこぼせたものは嘗て無かつた。

夕六時、インターラーケン着。ホテル・ユラに入る。

十月二十七日(月)

朝早く起きて、食事後、大通りに僧院のあたりまで散歩。上品な遊覽客村であるから、道端にならぶホテルや店なども氣がきいて見えて面白かつたが、しかし、此の一村の繁榮な所以は、何と言つても、はるか南天に聳えるユング・フラウの峰の景色である。今朝の散歩も、實は此の山を見んがためであつたが、目的は充分に達せられた。群山を抜いて立つ此の一萬四千尺の高峰は、其れを掩ふ白雪に日の光を受けて、何さとも言ひしれず美しかつた。

午前十一時インターラーケン發。所謂ベルン高地の山水を縫ひつゝ、汽車は更に西へ南へと走る。——モントルーへ着く前、車と共に山の上からゼネグ湖の夕暮の景色を眺めたのは幸ひであつた。今日見た景色の中には、時々、日本の山國を思はせるやうなものもあつた。

午後六時ゼネグ着。雨模様。

十月二十八日(火)

朝のあひだ、ゼネグの街々と湖岸河岸などを散歩した。近い水の景色、遠いモンブランの景色、何れも好い。河の小島にある記念像を見て「エルソー」を想ひ、大學や公園を歩いて「カルギン」を想ふ。

午前十一時、天文臺を訪問。既にマドリドで顔を見知つたゴーチエー臺長に會ひ、少時休憩後、シエール氏に案内されて器械などを見た。望遠鏡の中の最も興味を惹いたのは口径百センチ(四十吋)の大反射鏡であつた。鏡のみならず、据付装置から、部屋に至るまで、シエール氏自分が作つたやうなものだから、外觀は立派ではないが、實際の運轉は可なりうまう行くし、それに焦點比が三對一ださの事だから、光力

は頗る大きい。最近撮影の天體寫眞を六七枚見せられたが、見事であつた。中でも、琴座環狀星雲の長時間撮影原板に兩つの尾のやうなものが見えてゐたのは、氏自身も言つてゐた通り「新發見」に相違ない。ゴーチエー臺長の斡旋で、午後二時から、井ウ・グレンナール街の「ゼネグ物理器械製造會社」を訪ひ、所長 氏の案内で、製作中の大小天文器械を多く見た。

戦後のゼネグに、新しい名物の一つは國際聯盟本部である。今日午後の寸暇に、湖畔を散歩して、此の本部のあるパラス・デ・ナシオンを見た。

十月二十九日(水)

朝九時半ゼネグ發。ロザンスで、汽車乗換のために餘裕の出來た一時間を市内見物に費して、聖フランソワ廣場から大橋、大學、カテドラル、舊城などを一巡したのは忙しかつた。ついで、一時半、ニウシヤテル着。直ちに電車で天文臺に行き、ゴーチエー教授の紹介狀でアーント臺長に面會、案内されて内部を一巡した。此の天文臺は瑞西國の標準時觀測のための天文臺であるから、其の方面に關する設備が大に備はつて見えたのは豫期した所であつた。しかるに、十四時のツアーズ寫眞望遠鏡を収めたヘルシ館は「専ら天體物理研究のためです」のの説明により、臺長が新しい野心を持つてゐられることを知つたのは意外であつた。——一巡參觀の後、臺長夫人の好意により、臺長宅の客間で吾々のためにテイの會を催され、英獨佛語のまぜこぜで愉快な數刻を過した。

夕六時半ニウシヤテル發。八時半ベルン市に着。

○同志社支部

同好會の此の支部は去る五月十五日午後三時から同大學神學館第一教室で久しぶりの講演會を開いた。プログラム左の通り。——來會者は約五十名。

開會の挨拶

土星について(講演)

次の例會は六月五日(金)、山本氏講演「月の觀察」

支部幹事 飯 義 壽氏

京大教授 山本 一 清氏